

マダガスカル語の所有・存在表現

箕浦 信勝

0. イントロダクション

1. 前書き
2. 所有・存在構文の考察
3. 名詞プラス名詞の所有構造の考察
4. 結び

0. イントロダクション

本稿は、東京外国語大学『語学研究所論集』本号の特集「所有・存在表現」に関して、風間伸次郎が萬宮健策に助言を得つつ作成したアンケート項目（高垣 2012 ms.）に基づいて、マダガスカル語に関して調査を行い、その結果に考察を加えたものである。調査は、2012年12月中旬に、東京在住の豊田ライブ(M^{me} Ramaroarisoa ép. Toyoda Raivo)さんに協力をお願いした¹。

1. 前書き

オーストロネシア語族西マレー・ポリネシア語派のマダガスカル語には、存在動詞 *misy*、所有動詞 *manana* があるが、調査前から、データがそのどちらかに収束するものではなく、またどちらの動詞も使わないものも出てくるとの予想をしていた。

2. 所有・存在構文の考察

この節では、上述の高垣(2012 ms.)に基づいた調査結果を吟味していく。データ番号はアンケート項目の番号に合わせる。

¹ 豊田ライブさんは、言語形成期のほとんどをマダガスカル東岸のトゥアマシナで過ごしたが、家族構成および通った学校の関係で、地元のベツィミサラカ方言ではなく、中央高地の首都圏メリナ方言の話者である。ところどころ、標準語の規範と違うところがある（例えば、27cで接頭辞 *Ra-*で始まる人名にさらに冠詞の *i* を前倚するなど）が、それはそのままにした。

- (1) a. m-anana² maso manga iny olona iny³

AV.PRS-持つ 目 青い あの 人
「あの人は青い目を持っている」

- b. olona m-anana maso manga

人 AV.PRS-持つ 目 青い
「青い目を持った人」

【一体的（譲渡不可能的）な、恒常的な所有(1)】に関しては、manana（持つ）を使った表現が得られた。

- (2) a. lava volo iny olona i ny

長い 毛 あの 人 あの
「あの人は髪の毛が長い」

- b. vehivavy lava volo

女 長い 毛
「髪の毛が長い女」

【一体的な、恒常的な所有(2)】(上の(1)に比べると恒常性は下がる。)に関しては、manana（持つ）を使わない表現が得られた。こうした(1)と(2)の違いは、恒常性の度合いの違いに依るのか、それとも単に lava（長い）が述語として用いられることができる形容詞であり、またマダガスカル語が、いわゆる「象は鼻が長い」的構文⁴を良く用いる言語であるために、この様な表現が

² 本稿中の動詞は、特記している場合を除き、動作者態・現在時制の形式である。マダガスカル語には、動作者態(actor voice)、受動者態(undergoer voice)、状況態(circumstantial voice)がある。それらは、教科書等ではそれぞれ能動態(active voice)、受動態(passive voice)、関係態(relative voice)と表記されるが、それは採用しない。時制は、過去、現在、未来がある。また、ハイフンは形態境界(morph boundary)に挿入してある。正書法にあるハイフンは、“+”で置き換えている。本稿で採用している省略語は：ACC (accusative [case] 対格), ARL (areal 場所[名詞化]), AV (actor voice 動作者態), CAUS (causative 使役), CV (circumstantial voice 状況態), DEF (definite 定), GEN (genitive [case] 属格), IMP (imperative 命令), LNK (linker リンカー), NEG (negative 否定), OBL (oblique [case] 斜格), PQ (polar question 極性疑問), PRS (present 現在), PST (past 過去), UV (undergoer voice 受動者態), VM (valency marker 結合価標識)。

³ マダガスカル標準文章語では、名詞句に伴って用いられる指示詞（ここではiny）が、名詞句を取り囲むように前後に置かれて用いられることになっている。

⁴ 「lava volo iny olona iny（あの人は髪の毛が長い）」を「象は鼻が長い」的構文だと書いているが、もとより、日本語同様の「ハ」、「ガ」の区別があるわけではない。その一方で、「あの人」

得られたのかは、これだけでは結論付けがたい。

- (3) a. m-isy volo-m+bava iny olona iny
 AV.PRS-ある 毛-LNK+口 あの 人 あの
 「あの人は髭がある」
 b. lehilahy m-isy volo-m+bava
 男 AV.PRS-ある 毛-LNK+口
 「髭のある男」

【非普通所有物】に関しては、manana (持つ) ではなく、misy (ある) が得られた。

- (4) a. tsara fijery⁵ iny olona iny
 良い 眼力 あの 人 あの
 「あの人は目が良い」
 b. olona tsara fijery
 人 良い 眼力
 「目が良い人」
 c. m-anana fijery tsara iny olona iny
 AV.PRS-持つ 眼力 良い あの 人 あの
 「あの人はいい目を持っている」
 d. olona m-anana fijery tsara
 人 AV.PRS-持つ 眼力 良い
 「いい目を持った人」

【慣用句的表現】この質問事項に関して、マダガスカル語では、身体部位名詞 maso (目) は出て来なかった。また、manana (持つ) がある例(4c, d)と、無い例(4a, b)が得られた。(4a, b)では、tsara (良い) が述語となっており、(4c, d)では、manana (持つ) が述語で、tsara (良い) は fijery (眼力) の修飾語となっている。

- (5) a. roa amby roa-polo taona iny olona iny
 二 超過 二十年 あの 人 あの
 「あの人は22歳だ」

と「髪の毛」が所有構造で1つの句を成したり、「髪の毛」と「長い」が1つの述語を成すこともないという点を重視して、「象は鼻が長い」的な構文であると言っている。

⁵ fijery は動詞 mijery (見る) から派生した1つの名詞形である。(cf. 森山 2003)

b. olona roa amby roa-polo taona

人 二 超過 二十年

「22歳の人」

【側面語のある表現(1)】(5)では、数表現 roa amby roapolo taona (22歳) がそれぞれ主節の述語、関係節の述語となっている。manana (持つ) も misy (ある) も用いられない。

(6) a. m-anana toetra tsara/m-a-lemy/

AV.PRS-持つ 性格 良い/AV.PRS-VM-柔らかい/

m-a-lefaka iny olona iny

AV.PRS-VM-優しい あの 人 あの

「あの人は良い/柔らかい/優しい性格を持っている」

b. olona m-anana toetra tsara/m-a-lemy/

人 AV.PRS-持つ 性格 良い/AV.PRS-VM-柔らかい/

m-a-lefaka

AV.PRS-VM-優しい

「良い/柔らかい/優しい性格を持った人」

【側面語のある表現(2)】(6)では、manana (持つ) が使われている。

(7) a. lava ranjanana iny olona iny

長い 背丈 あの 人 あの

「あの人は背が高い」

b. olona lava ranjanana

人 長い 背丈

「背の高い人」

【側面語のある表現(3)】(7)では、manana (持つ) は用いられず、いわゆる「象は鼻が長い」的構文が用いられている。

(8) a. sivi-fofo amby zato sentimetatra ny halava-n'iny olona iny

九-十 超過 百 センチメートル DEF 長さ-LNK-あの 人 あの

「あの人の背丈は190センチメートルだ」

b. olona m-anana halavana sivi-fofo amby zato sentimetatra

人 AV.PRS-持つ 長さ 九-十 超過 百 センチメートル

「190センチメートルの背丈を持った人」

【側面語のある表現(4), 属性数量詞構文】(8a)では *halavan'iny olona iny* (あの人の背丈) が名詞句をなし, (8b)では *halavana sivifolo amby zato sentimetatra* (190センチメートルの背丈) が名詞句をなし, *manana* (持つ) が用いられている. いずれにせよ, 「象は鼻が長い」的構文を用いるにはそれぞれの構成要素が「大きすぎた」のかも知れない.

- (9) a. *efa+joro/karekare io vato io*
 四+角/四角 その 石 その
 「その石は四角だ」
 b. *vato efa+joro/karekare*
 石 四+角/四角
 「四角い石」

【側面語のある表現(5)】無生物主語の(9)では, 名詞 *efa-joro* (四角) あるいはフランス語からの外来語 *karekare* (四角) が述語となっている.

- (10) a. *m-a-ranitra/m-anam+pahaizana/*
AV.PRS-VM-鋭い √*AV.PRS-持つ+能力/*
m-anan+talenta iny olona iny
AV.PRS-持つ+才能 あの 人 あの
 「あの人は鋭敏だ/能力を持っている/才能を持っている」
 b. *olona m-a-ranitra/m-anam+pahaizana/*
 人 *AV.PRS-VM-鋭い* √*AV.PRS+持つ能力/*
m-anan+talenta
AV.PRS-持つ+才能
 「鋭敏な/能力を持った/才能を持った人」

【属性】(10)で外連声⁶によって *manam-/manan-* となっているものは, (1, 4b, 6, 8b)で使われている *manana* (持つ) と同じものである. 外連声が起こっている要因は, それを可能にする音韻環境と, 熟語化の度合いによるのかも知れない. *maranitra* (鋭い) は形容詞1語で述語となっ

⁶ 私は本稿で語と語の間の音韻論のプロセスを全て外連声と機械的に呼んでいる. その「外連声」によって繋がった2語が, 形態論的にも統語論的にも別個の語であるということがはっきりしていれば問題無いが, もし, 形態論的あるいは統語論的な観点から, 2語が1語として振る舞っていると考えた方がよい場合には, サンスクリット的な用語上, これは外連声ではなく内連声と見た方が妥当であるかも知れない. 以上, 細かな問題はあがあるが, それぞれ独立して使用される語と語の間で起こる音韻論のプロセスのことを外連声と呼んでいると理解されたい. 本稿の「外連声」は, マダガスカル語学では *fikamban-teny* (結びつき-言葉) と呼ばれている.

ている.

- (11) a. m-a-rary iny olona iny
AV.PRS-VM-病気だ あの 人 あの
「あの人は病気だ」
- b. olona m-a-rary
人 AV.PRS-VM-病気だ
「病気の人」
- c. m-anana hafanana iny olona iny
AV.PRS-持つ 熱 あの 人 あの
「あの人は熱を持っている」
- d. olona m-anana hafanana
人 AV.PRS-持つ 熱
「熱を持った人」

【一時的属性】「病気だ」は1つの形容詞 *marary* (病気だ) で表現され、「熱がある」は、*manana* (持つ) で表現されている。

- (12) a. m-an-ao akanjo manga iny olona iny
AV.PRS-VM-する 服 青い あの 人 あの
「あの人は青い服を着ている」
- b. lehilahy m-an-ao akanjo manga
男 AV.PRS-VM-する 服 青い
「青い服を着た男」

【衣服等(1)】(12)で、服を「着ている」ことは、もっと汎用的な意味を持った動詞 *manao* (する) で表現されている。

- (13) a. m-an-ao solomaso iny olona iny
AV.PRS-VM-する 眼鏡 あの 人 あの
「あの人は眼鏡をしている」
- b. lehilahy m-an-ao solomaso
男 AV.PRS-VM-する 眼鏡
「眼鏡をした男」

【衣服等(2)】(13)でも、*manao* (する) が使われている。(12, 13)からわかるのは、「身に付け

る」を表現するには *manao* (する) が使われるということである。

- (14) a. *m-anam+bady iny olona iny*
 AV.PRS-持つ+配偶者 あの 人 あの
 「あの人は既婚だ」
 b. *olona m-anam+bady*
 人 AV.PRS-持つ+配偶者
 「既婚の人」

【親族の所有(1)】(14)では、外連声を起こした *manam-* ← *manana* (持つ) が使われている。外連声が、この表現が熟語的表現であることを示唆している。

- (15) a. *m-anan+janaka telo iny olona iny*
 AV.PRS-持つ+子供 三 あの 人 あの
 「あの人は3人の子持ちである」
 b. *olona m-anan+janaka telo*
 人 AV.PRS-持つ+子供 三
 「3人の子持ちの人」

【親族の所有(2)】(15)でも、外連声を起こした *manan-* ← *manana* (持つ) が使われている。これも熟語的表現であろうが、意味論的結びつきは、[*manan+* [*janaka telo*]]であろう。この様なブラケティング・パラドックス⁷はマダガスカル語に多く見られる。

⁷ 「*manan-janaka*」の様な外連声による音声的結びつき強さの現れは、音韻的環境がそれをゆるし(具体的には前項が *ka*, *tra*, *na* で終わる)意味的結びつきが強いときにのみ見られる。音韻的環境がそれを許さない場合、あるいは意味的結びつきが弱い場合には外連声は起こらない。外連声規則適用前のこの2語は、*manana zanaka* (持つ 子供)である。これら2語のうち、前項が(外連声を起こしうる *na* で終わり、また、「子供を持つ」という述部的ユニットをなすこれら2語の結びつきが強いので、外連声を起こして *manan-janaka* となる。(正書法上の *j* は[*dz*].)このように、*manana*→*manan* と *zanaka*→*janaka* の結びつきは強いのであるが、*manan-janaka telo* となったときに、*janaka telo* (子供 3)がまず統語論的ユニットをなすと考えないと、*telo* (3)を何らかの付加語句と考えなければならなくなり、文法記述において不経済である。つまり、音韻的、形態的には *manan-janaka* (持つ-子供)の方が結びつきが強く、解釈によっては1語を成していると言えないこともない状態になっているが、統語論上は *janaka telo* (子供 3)の方が結びつきが強いので、それをここではブラケティング・パラドックスと呼んでいる。ブラケティング・パラドックスに関しては、3語からなる動詞句に *m-*から *mp-*への接頭辞の付け替えが適用される例(36k)と、その例に後続する本文での説明にも注目されたい。

- (16) m-anana tongotra valo ny orita
AV.PRS-持つ 足 八 DEF 蝟
「蝟は8本の足を持っている」

【普遍的な事実】(16)では, manana (持つ) が外連声を起こさずに使われている. このことは, 「足を持つ」という語の並びが熟語化していないことを示唆している.

- (17) a. m-isy alikaola io zava+pisotro io
AV.PRS-ある アルコール その 物+飲み その
「その飲み物にはアルコールが入っている」
b. zava+pisotro m-isy alikaola
物+飲み AV.PRS-ある アルコール
「アルコール入りの飲み物」

【ともに無生物, 含有物】無生物主語の(17)では, misy (ある) が使われている.

- (18) a. m-anan+karena iny olona iny
AV.PRS-持つ+富 あの 人 あの
「あの人はお金持ちだ」
b. olona m-anan+karena
人 AV.PRS-持つ+富
「お金持ちの人」

【もっとも一般的な所有, やや恒常的】(18)の manan-karena (お金持ちだ) は熟語的表現なので, manan- ← manana が外連声を起こしている.

- (19) a. m-anana alika ve ianao?
AV.PRS-持つ 犬 PQ あなた
「あなたは犬を飼っているか?」
b. olona m-anana alika
人 AV.PRS-持つ 犬
「犬を飼っている人」

【所有, やや恒常的, 所有物は有生・家畜】(19)では, 外連声を起こしていない manana (持つ) が使われており, manana alika (犬を持つ) が熟語的でないことを示唆している.

- (20) a. m-anana/m-i-tondra/m-amp-i-asa penina ve ianao?
 AV.PRS-持つ/AV.PRS-VM-運ぶ/AV-CAUS-VM-働く ペン PQ あなた
 「あなたはペンを持っている/携帯している/(普段から)使っているか？」
- b. olona m-anana penina
 人 AV.PRS-持つ ペン
 「ペンを持った人」

【一時的携帯物・自分のもの】(20)では、思いがけず「所有している」と、「携帯している」と、「(鉛筆ではなく)ペンを普段から使っている」の3つの表現が採録できた。ここでも manana (持つ) は外連声を起こしていない。

- (21) m-anana/m-i-tondra/m-amp-i-asa
 AV.PRS-持つ/AV.PRS-VM-運ぶ/AV.PRS-CAUS-VM-働く
 penina-n'olon+kafa iny olona iny
 ペン-LNK-人+他の あの 人 あの
 「あの人は他人のペンを持っている/携帯している/(普段)使っている」

【一時的携帯物・他人のもの】(21)でも(20)と同じ3つの動詞が使える。自分のものか、他人のものかの区別は、これらの例からは、無いように思われる。

- (22) a. tsara vintana iny olona iny
 良い 運 あの 人 あの
 「あの人は運がいい」
- b. olona tsara vintana
 人 良い 運
 「運の良い人」

【抽象的・一時的所有物】(22)は、「象は鼻が長い」的な構文で表現されている。

- (23) a. be/betsaka vato eto
 多い/多い 石 ここ
 「ここは石が多い」
- b. toerana/tany be/betsaka vato
 場所/土地 多い/多い 石
 「石の多い場所/土地」

【恒常的存在>状態/性質】(23)では、形容詞 be (多い), betsaka (多い) が述語となってい

る。be は「大きい」と「多い」の両方を表わすことがあるので、「多い」に限ることを明確にしたい場合には、betsaka (多い) (あるいは maro 多い) が使われる。

- (24) a. m-isy seza telo ao amin'io efitra io
AV.PRS-ある 椅子 三 そこに OBL-その 部屋 その
「その部屋には3つの椅子がある」
b. efitra m-isy seza telo
部屋 AV.PRS-ある 椅子 三
「3つの椅子がある部屋」

【非恒常的存在と数量】(24)では、misy (ある) を用いている。「どこどこに・で」は、場所指示詞(cf. 24a, ao)プラス任意に場所名詞(句)を後続させて表わされる⁸。

- (25) a. m-isy sotro eo amboni-n'io latabatra io
AV.PRS-ある 匙 そこに 上に-LNK-その テーブル その
「そのテーブルの上にはスプーンがある」
b. latabatra m-isy sotro
テーブル AV.PRS-ある 匙
「スプーンのあるテーブル」

【存在が新情報】「スプーンがある」がレーマの場合は、misy sotro (ある・スプーン) というように、動詞 misy (ある) が使われる。

- (26) a. eo amboni-n'ny latabatra ilay sotro
そこに 上に-LNK-定冠詞 テーブル 件の 匙
「例のスプーンはテーブルの上にある」
b. sotre eo amboni-n'ny latabatra
匙 そこに 上に-LNK-定冠詞 テーブル
「テーブルの上にあるスプーン」

【所在・場所が新情報】(26)「テーブルの上」がレーマの場合は、場所指示詞句 eo ambonin'ny latabatra (そこに 上に-定冠詞 テーブル) が述部となり動詞 misy (ある) は使われない。

⁸ 場所指示詞句を形成する際、名詞が場所名詞の場合は場所指示詞に場所名詞を後続させる。Cf. any Madagasikara あそこで・マダガスカル→マダガスカルで。さらに cf. 25a, 26, 33b, 35b, c). 非場所名詞は、接頭辞 an-を付けて場所名詞にするか (cf. ao an-trano そこで・ARL-家→家で。cf. 28a), 斜格前置詞 amin' を使って場所名詞句にしてから指示詞を前に置いて使う(24a, 35d).

- (27) a. ahy io penina io
私(ACC) その ペン その
「(近くにある) そのペンは私のだ」
- b. ahy iny penina iny
私(ACC) その ペン その
「(あなたが持っている) そのペンは私のだ」
- c. an'i Rakoto iny penina iny
ACC-DEF ラクトゥ その ペン その
「そのペンはラクトゥのだ」
- d. peni-ko
ペン-私(GEN)
「私のペン」
- e. penina-n+dRakoto
ペン-LNK+ラクトゥ
「ラクトゥのペン」

【所有物・属格のプロトタイプ】「誰々のだ」という述部は、名詞、代名詞を対格に置いて表わされる。「誰々の○○」は、代名詞の場合は後倚辞の属格形で表わし、名詞が名詞を修飾するときには、2つの名詞の間にリンカー-n-を置く⁹。

- (28) a. n-isy afo t-any an+tsekoly omaly
PST-ある 火 PST-あそこで ARL+学校 昨日
「昨日学校で火事があった」
- b. may ny sekoly omaly
燃える DEF 学校 昨日
「昨日学校が燃えた」
- c. m-anan+k-a-tao aho rahampitso
AVPRS-持つ+未来-UV-する私 明日
「私は明日用事があります」

【できごとの生起】misy (ある) の過去形 nisy (あった) が使われたり(28a), 燃えるという述語が用いられたり(28b), manana (持つ) の外連声を起こした manan-が使われたりする。

⁹ リンカー-n-は、正書法上は、前項の名詞とはハイフン無しで繋げて書かれ、後ろの名詞との間にはハイフンが置かれる。また外連声のせいで、-m-になったり、ゼロになったりもする。

- (29) tsy m-isy lolo/angatra izany
 NEG AV-PRS-ある 幽霊/お化け なんて
 「(この世に) 幽霊/お化けなんていない」

【実在文】(29)ではすなおに, misy (ある) が否定されて使われている。

- (30) m-isy ny olona m-i-teny anglisy,
 AV-PRS-いる DEF 人 AV-PRS-VM-話す 英語,
 ary m-isy koa ny tsy m-i-teny
 そして AV-PRS-ある も DEF NEG AV-PRS-VM-話す
 「英語を話す人もいるが, 話さない人もいる」

【絶対存在文(1)】(30)も素直に misy (いる), tsy misy (いない) が使われている。英語の some に当たるものは使われていないが, 定冠詞 ny が用いられている。定冠詞 ny は(31)には見られないので, これは, 対比のためなのだろうか。はっきりとしたことはわからない。

- (31) m-isy olona m-a-hay m-i-teny anglisy
 AV-PRS-いる 人 AV-PRS-VM-できる AV-PRS-VM-話す 英語
 noho izaho
 よりも 私
 「私よりも英語ができる人はいる」

【絶対存在文(2)】(31)も素直に misy (いる) を使っている。

- (32) m-isy zavatra i-angavi-a-ko kely anao
 AV-PRS-ある こと VM-お願いする-CV-私(GEN) ちょっと あなた(ACC)
 「ちょっとあなたにお願いがあります」

【抽象的なことの所有・発話内効力のある文】(32)でも, misy (ある) が使われる。

2.1. 所有・存在構文の考察の纏め

所有構文に関して角田(1991)によって提案されている「身体部分>属性>衣類>親族>愛玩動物>作品>その他の所有物」という所有傾斜を見ると, そのヒエラルキーのどこにどの述語が現れやすいという傾向は, マダガスカル語に関してはあまり見て取れない。所有表現には manana (持つ) が用いられるもの, それが外連声を起こした manan-/manam-が用いられるもの, misy (ある) が用いられるもの, manao (する) が用いられるもの, 他の動詞が用いられるもの, 形容詞述語が用いられるもの, 名詞が用いられるもの, 数表現が用いられるもの, 場所指示詞

句が用いられるものが見られた。そもそもマダガスカル語にはコピュラが無いが、名詞がそのまま用いられる場合と、manana/manan-/manam-の補語として用いられる場合に関しては、その選択について今後吟味が必要であろう。また、名詞述語文に関して、メトニミーを大胆に利用した「僕はウナギだ」的な文は無節操に使われる訳ではないようである。

manana (持つ) が用いられたのは、「一体的な、恒常的な所有」(1), 「慣用句的表現」(4c, d), 「側面語のある表現」(6), 「一時的属性」(11c, d), 「普遍的な事実」(16), 「家畜の所有」(19), 「一時的携帯物」(20, 21)があった。manana が後続する名詞と外連声を起こして manan-/manam-になっている、すなわち熟語的だ(言い換えると語彙的単位を成している)と見なしうるものは、「属性」(10), 「親族の所有」(14, 15), 「もつとも一般的な所有, やや恒常的」(18), 「できごとの生起」(28c)などで、他言語の状況はどうあれ、少なくともマダガスカル語では熟語的な例であった。

misy (ある) が用いられるものは、「非普通所有物」(3), 「ともに無生物, 含有物」(17), 「非恒常的存在と数量」(24), 「存在が新情報」(25), 「できごとの生起」(28a), 「実在文」(29), 「絶対存在文」(30, 31), 「抽象的なことの所有・発話内効力のある文」(32)であった。2つの項がともに無生物である場合や(17), 非普通所有(3), 抽象的なことの所有(32)に manana (持つ) ではなく、misy (ある) が用いられたのは興味深い。

manao (する) が用いられるのは、衣服(12)や眼鏡(13)を「している, 身につけている」という表現で、ここだけ特殊である。他の動詞 mitondra (運ぶ) と mampiasa (使う) は「一時的携帯物」(20a, 21)で用いられている。また、may (燃える) は「できごとの生起」(28b)で用いられている。

以上の動詞のうち、manao (する) は、身に付けるものに用いられる。manana (持つ) と misy (ある) の区別に関しては、匿名の査読者 no. 2 から、先行文献はネット上にも検索すればすぐ見つかるので、先行研究で何か言われていないかを確認する手続きを踏んだ上で、どういう使い分けがなされるのかを明示せよとのコメントがあった。ネット上を調べたところ、misy に関しては、何件か先行論文がヒットしたが、理論言語学に特化したものであったり、使い易いものは Fugier (1999) だけであった。manana に関しては、検索語を色々工夫(英語とフランス語で existential construction と検索したり)しても何もヒットしなかった。Fugier は、書名になっている統語論のみならず、形態論的にも示唆の多い書籍である。しかし、特に misy と manana の使い分けに関する示唆的な記述は、査読後の短い時間では見つからなかった。今回集めたデータから言えることは、manana の所有者が有生物に限られるということ、misy は、所有者が無生物か、所有者が指定されないばあいがあるが殆どであった。misy が有生物の所有者を取るの、非普通所有(3), 抽象的なことの所有(32)に限られた。

形容詞述語が用いられるのは、「一体的な恒常的な所有」(2), 「慣用句的表現」(4a, b), 「側面語のある表現」(7), 「属性」(10), 「一時的属性」(11a, b), 「抽象的・一時的所有物」(22), 「恒常的存在>状態/性質」(23)で、形容詞述語で表現できる場合には、それを述語にするということ

のようである。「目がいい」という時に、形容詞述語 *tsara* (良い) を使う例(4a, b)と *manana* (持つ) を使う例(4c, d)が得られたのは興味深い。両者の間で、*tsara* (良い) と *fijery* (眼力) の位置関係が反対になっていることに注目されたい。(4c, d)では、*tsara* (良い) は *fijery* (眼力) の修飾語になっている。

名詞が用いられているとも見える「側面語のある表現」(9)の *efa+joro* (四-角) は、referent のある典型的な名詞ではなく、寧ろ文の主語の属性を示す語であり、形容詞的な働きをしているのかもしれない。メトニミーを大胆に利用した日本語等の「僕はウナギだ」的な文とは大幅に異なるものと考えられる。(9)で入れ替えることができる、*karekare* (四角い) は、フランス語からの外来語 (← *carré*) の疊語で、こちらの方はさらに形容詞的である。

数表現が用いられるものは、年齢を表わす「側面語のある表現」(5)、背丈を表わす「側面語のある表現」(8)で、数詞句述語を用いることができる場合には、*manana* (持つ)、*misy* (ある) などを必要としないことがわかる。しかしながら、これは、「蛸は足を8本持っている」という「普遍的な事実」(16)で、*tongotra valo* (足 八) がそのままでは述語とならず、*manana* (持つ) を必要としている (つまり、「蛸は足が八(本)である」とは言わない) のと対照的である。

場所指示詞句が用いられるものは、「所在・場所が新情報」(26)で、「存在が新情報」(25)の時に *misy* (ある) が用いられるのと対照的である。

3. 名詞プラス名詞の所有構造の考察

以下では、高垣(2012 ms.)に基づき、名詞が名詞を修飾する構造を見ていく。

(33) a. *orana amin'ny ririnina* 【時間】

雨 OBL-DEF 乾季

「乾季の雨」

b. *trano any Antananarivo* 【場所】

家 あそこに アンタナナリブ

「アンタナナリブの家」

マダガスカル語で最も良く用いられる「A の B」にあたる所有構造は、リンカー *-n-* を使った「B-n+A」であるが(cf. 脚注 6)、上の例で、季節は斜格に置かれ、場所は指示詞プラス場所名詞で表現されている (場所表現に関して詳しくは脚注 5 を参照されたい)。

(34) a. *ny filomano-ny* 【B が行為を示す名詞である場合の主体】

DEF 泳ぎ-彼(GEN)

「彼の泳ぎ」

b. *ny filomano-n+dRakoto* 【B が行為を示す名詞である場合の主体】

DEF 泳ぎ-LNK+ラクトゥ

- 「ラクトウの泳ぎ」
- c. ny fivohazan'ny alika **【B が行為を示す名詞である場合の主体】**
 DEF 吠え-DEF 犬
 「犬の吠え」
- d. ny fivovohan'ny alika **【B が行為を示す名詞である場合の主体】**
 DEF 吠え-DEF 犬
 「犬の吠え」
- e. ny fipoaka-n'ny volcan **【B が行為を示す名詞である場合の主体】**
 DEF 爆発-LNK-DEF 火山
 「火山の爆発」
- f. ny famoizana fiarakodia **【B が行為を示す名詞である場合の客体】**
 DEF 運転 自動車
 「自動車の運転」
- g. ny fivoizana bisikileta **【B が行為を示す名詞である場合の客体】**
 DEF 運転 自転車
 「自転車の運転」
- h. ny boki-n'i Rabearivelo **【A の生産物である B】**
 DEF 本-LNK-定冠詞 ラベアリベル
 「ラベアリベルの（書いた）本」

【B が行為を示す名詞である場合の主体】の場合、通常の所有構造になる。A が人称代名詞である場合には、属格後倚辞人称代名詞を用いる(34a)。 (34b)では、行為者は、モノの所有者を表現するのと同様の形式で、リンカー-n-を介在させて表現される。(34c, d)では、A の前に定冠詞 ny が置かれ、B の行為名詞は末尾の母音 a を落としてその ny に接続している。(正書法上は、ny の前にアポストロフィが書かれる。) (34e) では行為名詞と定冠詞の間にリンカー-n-が置かれている。(34c, d)にリンカー-n-が見られないのは、音韻論的な条件によるのか、形態論的な条件によるのか即断はできない。

【B が行為を示す名詞である場合の客体】の場合、客体・対象を表わす名詞 B は、動詞の補語の時と同じ形(即ちゼロ格)を取り、リンカー-n-による所有構造にはしない(34f, g)。これも[動詞 補語]の動詞句全体が行為名詞(句)化を受けたとかがえることもでき、(15, 37k)のブラケティング・パラドックス的な現象に連なるかもしれない。別の見方をすれば、「主体名詞句」が属格代名詞(34a)や属格的に働く「リンカー(+定冠詞)+名詞」(34b, c, d, e)で現われ、「客体名詞句」がゼロ格で現われるのは、述語動詞との関係で(焦点化主語でない)「主体名詞句」、「客体名詞句」が採る形式と同一である。

【A の生産物である B】の場合、A と B はリンカー-n-で繋がれる。

- (35) a. ny reni-n'i Mamy 【親族】
DEF 母-LNK-DEF マミ
「マミのお母さん」
- b. avi-a eto/atỳ akaiki-n'ny banc/latabatra 【場所名詞】
来る-IMP ここへ/ここへ 近く-LNK-DEF 机/テーブル
「机/テーブルの近くに来て！」
- c. avi-a eto/atỳ anoloa-n'ny banc/latabatra 【場所名詞】
来る-IMP ここへ/ここへ 前-LNK-DEF 机/テーブル
「机/テーブルの前に来て！」
- d. avi-a eto/atỳ amin'ny banc/latabatra 【場所名詞】
来る-IMP ここへ/ここへ OBL-DEF 机/テーブル
「机/テーブルの所に来て！」
- e. aorian'iny olona iny 【時間的關係】
後-あの 人 あの
「あの人の次」

(35a)の親族は、リンカー-n-で繋がれている。(35b, c)で、「近く/前」も、リンカー-n-で繋がれている。「近く/前」の様な位置關係が特定されない場合(35d)には、斜格前置詞 amin'が用いられる。場所指示詞句に関しては、脚注5を参照されたい。時間的關係(35e)はリンカー-n-無しで直接で繋がれている。

- (36) a. fela-n+draozy 【種別】
花びら-LNK+バラ
「バラの花びら」
- b. antsi-m+boankazo 【用途】
ナイフ-LNK+果物
「果物のナイフ」
- c. fiamanidina/aéroplane vita amin'ny taratasy 【材料・材質】
飛行機/飛行機 できた OBL-DEF 紙
「紙の飛行機/紙でできた飛行機」
- d. hena-n+kisoa 【材料・材質】
肉-LNK+豚
「豚肉」
- e. sarina tulipe 【内容】
絵 チューリップ

- 「チューリップの絵」
 f. sarin'akondro 【内容】
 絵 バナナ
 「バナナの絵」
 g. sarina paoma 【内容】
 絵 リンゴ
 「リンゴの絵」
 h. fofona voninkazo 【産出物】
 匂い 花
 「花の匂い」
 i. fofom+boninkazo 【産出物】
 匂い+花
 「花の匂い」
 j. taratasy amin'ny teny anglisy 【表現形式】
 紙 OBL-DEF ことば イギリスの
 「英語の手紙」
 k. mpampianatra teny japoney 【職種】
 先生 ことば 日本の
 「日本語の先生」
 l. divai-n'ny Betsileo 【産地】
 ワイン-LNK-DEF ベツィレウ族
 「ベツィレウ族のワイン」
 m. divai-n'i Fianarantsoa 【産地】
 ワイン-LNK-DEF フィアナランツア
 「フィアナランツア州のワイン」
 n. andro m-an-orana 【状況】
 日 AV.PRS-VM-雨降る
 「雨の日、雨降る日」
 o. andro m-an-drivo+doza 【状況】
 日 AV.PRS-VM-嵐吹く
 「サイクロンの日、サイクロンが吹く日」

上の諸例は、リンカー-n-で繋がれている例とそれ以外に分けられる。【種別】(36a), 【用途】(36b), 【産地】(36l, m)は、リンカー-n-で繋がれている。(36b で-n-が-m-に変化していることに関しては脚注 6 を参照されたい。)【材料・材質】で「作った」という行為が意識されるときに

は、(36c)の様に動詞 *vita* を主要部とする関係節で表現しないと行けない。素材であっても「豚肉」(36d)は、リンカーを使って表現される。【内容】(36e, f, g)はリンカーを介さずに「BA」と表現される。(36f)では、外連声で、*sarina* の末尾母音が落ちて *sarin'* になっている。【産出物】(36h, i)もリンカーを介さずに「BA」と表現されるが、外連声の起きていない(36h)と起きている(36i)が見られる。【表現形式】(36j)は、斜格前置詞 *amin'* が使われている。【何々の先生】(36k)でも、リンカーは使われない。これには理由があり、*mampianatra teny japoney* (日本語を教える) という動詞句全体が動詞初頭の *m* を *mp* に変えることによって行為者名詞句に変化するので、補語の格がゼロ格から変わることが無い。よって、リンカーが使われることは無い。これは(15)同様のブラケットィング・パラドックスの例と考えられる。天候などの【状況】(36n, o)は、天候の方が名詞ではなく動詞で表わされ、それが関係節として主要部名詞を修飾する。(manorana (雨降る)に対して、名詞、雨は *orana*; mandrivo-doza (嵐吹く)に対して、名詞、サイクロンは *rivo-doza*)。

- (37) a. Baholy zandri-ko vavy 【同格】
バフリ 年下のきょうだい私(GEN) 女の
「私の妹のバフリ」
- b. Ramose Ravalomanana tompo-m+piasana 【同格】
ムシュー ラバルマナナ 主人-LNK+職場
「社長のムシュー・ラバルマナナ」
- c. Ramose Ravalomanana mpiandraikitra ambony 【同格】
ムシュー ラバルマナナ 責任者 一番上の
「最高責任者のムシュー・ラバルマナナ」

【同格】(37a-c)は、リンカーを介さず、名詞(句)を並置することで表現される。次に、所有構造が入れ子に重ねられるかを見る。

- (38) vaky tampoka hono ny kodiara-n`ny
壊れた 突然 そうだ 定冠詞 車輪-LNK-DEF
fiarakodia-n`ny rai-n`ny namana mipetraka
自動車-LNK-DEF 父-LNK-DEF 友達 住む
ao amin`ny trano ao ambadika omaly
そこに OBL-DEF 家 そこに お向かいに 昨日
「昨日お向かいの家の友達のお父さんの自動車の車輪がパンク
したんだって (→直訳) 昨日お向かいの家に住む友達のお父さんの
自動車の車輪がパンクしたんだって」

マダガスカル語は、語を選べば、日本語で「の」を多く重ねて使えるように、名詞(句)をリンカーで長く連ねることもできるかも知れないが、(38)では、リンカー・プラス名詞ではなく、他の修飾節にとって代わってしまっているところがある。

その他、質問項目には無かった例を2つ挙げる。

- (39) a. toto+kena
 搗き+肉
 「挽き肉」
 b. ravitoto
 「ラビトゥトウ」

(39a)は、肉が単独形 *hena* から *kena* になっていることから、元来は **toto-n+kena* (搗き-リンカー-肉) から *n* が分節音としては脱落してしまってできた形と考えられる。もし歴史的に *-n* があったことが想定されなければ、外連声を起こしていない **totohena* になるはずである。またマニオクの葉を搗いて作られるマダガスカル料理「ラビトゥトウ」は、*ravina+toto* 「葉+搗き」から来たことは明らかであるが、通常想定される外連声後の **ravintoto* から、これはリンカーではなく、語根に属する *n* が脱落して *ravitoto* となったと考えられる。ここで問題にしたいのは、名詞と行為動詞の語根 *toto* の順番が、この2例で逆になっていることである。マダガスカル語は類型論的には VO 型で、主要部+従属部の順になるのが通常であるが、化石化¹⁰した表現には、*totokena* の様に逆になっているものもあるということを指摘しておきたい。

3.1. 名詞プラス名詞の所有構造の纏め

名詞プラス名詞の所有構造は、多くが、日本語の「A の B」に対して、リンカー-*n*を用いた「B-*n*+A」の形を持っている。しかし、「A」の側が別な形になっているものも多く見られた。

「B が行為を示す名詞である場合の主体」は、(34b, e)でリンカー-*n*を確認できたが、(34c, d)では見られなかった。これは、元々あった-*n*が音韻規則の中で消えてしまったのか、元々無かったのか、拙速に断じることはできない。しかしながら別の見方をすると、動詞との関係で焦点化主語となっていない受動者態および状況態の主体 (=動作者) 名詞句は「リンカー-(DEF)+名詞」の形を採るので、ここでの名詞を修飾する主体名詞句ももしかしたらそれと同じ形式を採っているのかも知れない。

他方、「B が行為を示す名詞である場合の客体」(34f, g)では、「客体」は動詞の補語であると

¹⁰ 化石化とは、この「主要部+従属部」の順番の方が古いと決めつけているわけではなく、類似のリンカー -*ng* を持つタガログ語が、「主要部+*-ng*+従属部」、「従属部+*-ng*+主要部」の両方の順番を許していることなどを念頭に置いている。

きと同じゼロ格形を取り、リンカー-n-を介在させない。「主体」の方がリンカー-n-を介在させたり、属格代名詞を使ったりして(34a)、動詞が動作者態ではなく、受動者態および状況態の時の動作者が取る形式と同一であるのは、単に名詞が名詞を修飾しているから「B-n+A」の形をとっているというよりは、「名詞化以前」の元の「動詞句」における名詞の振る舞いと軌を一にしていると考えれば、「客体名詞句」がゼロ格を採ることと符号する。

その他、「Aの生産物であるB」(34h)、「親族」(35a)、「時間的關係」(35e)、「種別」(36a)、「用途」(36b)、「材料・材質」(36d)、「産地」(36l, m)で、リンカー-n-を介在させた「B-n+A」の形が見られた。

リンカー-n-を介在させない「BA」は、上に論じられているものも含めて、「Bが行為を示す名詞である場合の主体」(34c, d)、「Bが行為を示す名詞である場合の客体」(34f, g)、「内容」(36e, f, g)、「産出物」(36h, i)、「職種」(36k)、「同格」(37)があった。「職種」(日本語の先生)に関しては、*mampianatra teny japoney*(教える ことば 日本の、日本語を教える)の3語からなる動詞句全体を m-から mp-への接頭辞付け替えによって行為者名詞句にしているので、「日本語」はもとのゼロ格を保ち、リンカー-n-を介在させない。

「A」が前置詞句に取り込まれたのは、「時間」(33a)、「表現形式」(36j)である。

「A」が場所指示詞句に取り込まれたのは、「場所」(33b)、「場所名詞」(35b, c, d)である。(38)の多重所有構造にも、場所指示詞句が2つ認められる。

また、典型的なVO言語であるマダガスカル語では、通常「B-n+A」において、「B」が主要部であるが、化石化した表現には、「A」の方が主要部と考えられるものもあることを(39a)で見た。

4. 結び

所有・存在構文に関しては、マダガスカル語では *manana* (持つ) を述語に採る文、*misy* (ある) を述語に採る文に収斂することは、予想通りに無かった。しかし、有性物所有者の時には基本的に *manana* (持つ) を使い、無生物所有者の場合や、所有者が特定されない存在文の場合には *misy* (ある) が用いられることが観察できた。有性物所有者でありながら *misy* (ある) を使うのは、非普通所有(3)、抽象的なことの所有(32)に限られた。その他、身に付けるものを目的語として採る場合には *manao* (する/身に付ける) が用いられ、またその他の動詞述語が用いられる文、形容詞述語が用いられる文、名詞述語が用いられる文、数表現が用いられる文、場所指示詞句が用いられる文など、できうる限りのばらけ方をした。

名詞プラス名詞の所有構造に関しては、多くの例が日本語の「AのB」に対して、リンカー-n-を用いた「B-n+A」の形を持っている。しかし他の例も見られた。「B」が動作の客体を表わす場合には動詞の目的語となるときと同じ裸形(リンカー-n-を用いない形)で「BA」の様に表現された。そう考えると、「A」が動作の主体を表わす場合も、動詞に対して焦点化主語になっていない受動者態および状況態の動作主形「-n-A」が用いられているのでたまたま「B-n+A」

という他の所有構造と同形になったと見ることもできる。そうなると、節あるいは動詞句が名詞句化されたときには、一律他の所有構造に合流するのではなく、項名詞句は節あるいは動詞句との関係で採っていた形式を採るということになる。(36k)「職種」にリンカーが現れないのもそれと軌を一にする。その他にも、リンカー-n-を介在させない「B A」を採るパターンがいくつかあった。また「A」が前置詞句に取り込まれた例、場所指示詞句に取り込まれた例もあった。また「B-n+A」において、通常は「B」が主要部であるが、化石化した表現の中には「A」の方が主要部と見られるものもあった。

参考資料

高垣敏博 2012 ms. 「語研論集特集へのご協力のお願い」.

角田太作 1991 [2009]. 『世界の言語と日本語』, くろしお出版.

森山工 2003. 『マダガスカル言語研修テキスト』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Fugier, Hugiette 1999. *Syntaxe Malgache*, Louvain-la-Neuve: Peeters.